



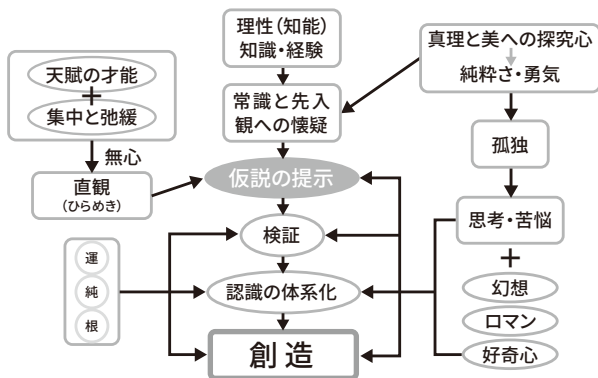
創造するということ

創造するということ、クリエイティブであること、それは研究者に限らず、生きているなかでつねに求められるべきものです。

「誰もが身につけられるものではない」と思っている人も多いかもしれませんが、果たしてそうでしょうか？

もちろん、何かを表現するためには能力が求められますし、特定の技術も必要になります。通常、学校で教わるのはそうしたテクニカルなのですが、感

創造のプロセス



覚や感性までが身につくかはわかりません。

感覚や感性のない仕事は、過去の模倣であって創造とは呼べないでしょう。

戦後の日本の教育は、残念ながら、模倣のほうに重きが置かれ、創造性を育てる場にはなかなか得なかつたと思います。

その状態から抜け出すためには、それまで受けてきた教育とはまた違った発想が求められてきます。

わかりやすく言えば、それは直観を磨くことから始まります。

これまで論理的思考ばかりしてきた人にとっては、おそらく最も苦手と感じるところでしょう。論理的思考も確かに必要なものですが、研究の核にあるのはそうした非論理的なものにほかなりません。論理を超えた直観なくして、質の高い研究は成り立つものではないのです。

では、直観はどのように得られるものなのでしょうか？

前ページの内容図をご覧になってください。私はこうした図を作ることが好きで、腸内細菌の研究にもずいぶん役立ってきましたが、これは研究の大元にある「創造のプロセス」に関するものです。

直観を得るためには、何よりもまず無心にならなければなりません。

無心といっても、ここでは無念無想の境地のような高尚なものをイメージしているわけではありません。

無心になるために大事なものは、集中と弛緩です。緊張とリラックスという言葉に置き換えてもいいかもしれませんが、この絶えざる繰り返しのなかで、まるでエアポケットのようにそれはやってきます。

ふっと無心になる瞬間があり、そこに直観が働くわけです。

大きな発見につながるようなひらめきは、しばしば偶然を装うようにして、このように突然やってきます。

客観的な検証が求められる科学の世界であっても、根幹にあるのは、人間では説明できない不意な何かです。

まずはそれを、健全な形で育てることを意識すべきでしょう。

私の場合、こうした創造の土台となる部分を音楽との出会いによって得ることができました。具体的に言えば、バイオリンの演奏です。成蹊学園時代、前述した草川信先生は、私たちにこう言いました。

「君たちは変声期だからあまり歌わないほうがいい。代わりに授業ではいい音楽を聴くことにしましょう」

私はこの一風変わった前川先生の授業で、様々な西洋音楽に触れることができ、とりわけベートーベンの熱烈なファンになりました。

後年、ドイツのベルリンへの留学が実現した時も、現地での研究もさること

ながら、そこがベートーベンの故郷であり、ベルリンフィル発祥の地であったことに胸が踊る思いがしたものです。



私の場合、音楽をただ聴くだけにとどまらず、18歳の時から11年にわたって、東京芸大で教鞭をとられていたバイオリニストの岩崎洋三先生^{*12}に師事し、本格的な指導を受ける機会も得てきました。

岩崎先生は、私が初心者であることなど意にも介さず、プロ並みの本格的なレッスンを課してきました。

2週間に1回、日曜日の午後¹³に先生のレッスンを受け、レッスンの後に課題になった楽曲のLPや楽譜を駅前¹⁴の古レコード屋で買って帰り、次の日曜は音楽を聴きながらひたすら独習するのです。

研究生生活が忙しくなっても、この習慣はずっと続き、私がプロを目指す学生

*12

1914〜2000年。本名は岩崎吉三。東京芸術大学名誉教授。岩崎洋三の名で、バイオリニストとしても活躍した。

が習うようなバイオリンの名曲を次々とこなしていくため、先生にもずいぶん不思議がられたものです。

実際に続けていくなかでわかったのですが、私には耳にした曲の音譜が頭に再現できてしまう能力があり、すぐに曲が覚えられるため、練習がつらいと思っただことは一度もありません。

とにかくバイオリンを弾くことが楽しいのです。

おかげで、アマチュアオーケストラの奏者になり、演奏会を開くなど、生涯を通じて音楽と関わりあう縁に恵まれました。

もしかしたら、これも天賦の才能と呼べるものだったのかもしれませんが、それは特別なものというより、何か好きなことに打ち込んでいる時、発揮できているもののようにも思います。

あまり難しく考えず、好きなことを見つけ、それを続けていられる状態を思い浮かべてみてください。何かに打ち込んでいる時、人は無心であり、余計なことはあまり考えません。

ふっと幸福であることを感じるのは、そうした時でしょう。

幸福は他人によってもたらされるものではなく、まして地位や肩書きで保証されるものでもなく、自分自身でつくりだすものです。その時、誰もが創造のプロセスを体験していると思うのです。



集中と弛緩の大切さについて、もう少し補足しましょう。

好きなことに打ち込むのは良いことですが、集中が持続すると体は緊張し、次第にストレスも増してきます。あまりこの状態が続くと、体が悲鳴を上げはじめ、肝心の直観も得られにくくなってしまいうでしょう。

リラックスも大事なのです。それはただ休むだけでなく、違うことをする、環境を変えることで得られやすくなります。

私は、腸内細菌の研究とバイオリンの演奏と、異なる世界を行き来すること

でこうしたバランスを取っていたように思います。どちらも同じように集中と弛緩を要しますが、まったく異なる分野であることから、行き来すること自体が私にいい気分転換をもたらしました。

ただ散歩をするだけでもいいのです。いくら好きなことでも、同じ状態にとどまり続けないことです。

時々、意識して違う景色を見るようにすると、いつの間にか硬直していた自分に気づき、創造性の回路が賦活しはじめます。

大上段に構えて言うわけではありませんが、学問というのは、真理の探究や発見のためにこそ存在するものです。

これに対して、音楽や絵画などの芸術は美の創造、哲学や宗教は善の探究のために存在しています。これらを合わせて「真・善・美」と呼ばれていますが、いずれも根底においては創造性が求められます。

何をするのであれ、クリエイティブであるということは、真善美を追求していることにほかなりません。

そこでは、何よりも無欲であることが求められます。

物質的な欲望を追求することも非常にエネルギーシユな行為であり、この世で生きていくうえでその原動力になりますが、真善美の探究では邪魔になります。善し悪しの問題ではなく、それは両立できません。

欲を捨てることを悟りつつなげる人もいますが、そのように大げさには考えず、創造性を担保するために必要なことだと理解すればどうでしょうか？

仕事をするうえで、この部分を忘れてしまうと、お金だけ、数字だけを追い求め、そこに快を求めるしかなくなります。いい仕事をするためにも、いったん欲を捨ててみるのです。

損得勘定抜きに好きなことに打ち込んでいくと、それが結果として仕事になり、利益を生むこともあります。

事実、私の研究生生活はそのようにしてまわっていきました。恵まれていると思われるかもしれませんが、そういう感覚が根底になれば何も生み出せず、まともな研究生生活もできなかつたでしょう。

それは、科学者が求める真理へとつながる大事な切符のように思えます。無心のところから始まったからこそ、わからないことがわかり、ここまで世界が広がったのです。



もっとも、科学の世界は、直観だけで成り立っているわけではありません。直観が生まれたら、次に必要なのは仮説の証明です。

ひらめきをただのひめらきで終わらせないためには、感じたことを形にし、たくさんの人と分かち合っていく必要があるからです。

直観したことは、自分のなかにしかありませんから、思うように形になるまでは、たえず孤独や苦悩がつきまといきます。

ただ、それと同時に幻想やロマン、好奇心も生まれるでしょう。

尊敬するベートーベンにまつわる「苦悩を突き抜け歓喜にいたれ」という言

葉が知られていますが、それはまさに創造のプロセスそのものを言い表しているように私には思えます。^{*13}

仮説を証明していくために必要なのが検証であり、検証を積み重ねることで認識は体系化されていきます。

それは確かに大変なことかもしれませんが、でも、自分が探究したいことに対してそうした気持ちでいつづけるのはとても大切なことです。

一步一步、まずできることを続けてみてはどうでしょうか？

ルーティンなことであっても、そこに何らかの意義が見出せると、退屈なものではなくなります。研究生活の大部分はそうしたルーティンで成り立っています。その意味では、単調で退屈なことの繰り返しのように映るかもしれませんが、自分の意識次第で意味は変わってきます。

その点は、どんなことであっても同じであるように思います。

「運・鈍・根」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？

物事を成し遂げるには運の良さが必要になりますが、それは突然舞い込んで

*13
原文はシラーの詩
「歡喜に寄せて」。
バートーベンの晩
年の代表作「交響
曲第九番・第4楽
章」の主題にもな
っている。

くるわけではありません。たとえそのように見えたとしても、その背後には自らが望んでいることに対する愚直さ（＝鈍）やあきらめない気持ち（＝根）があつて初めて生まれるものです。

望んでいることを形にするには、時間も労力もかかります。何も形になつていないうちは不安も湧いてくるものですが、それ自体が「創造のプロセス」に組み込まれたものであるはずです。



自分を信じて、前に進んでいくようにしてください。困ったことがあつても、あなたを助けてくれる人は必ず現れます。

私はつねに信念を持って前進するような、そうした力強さを持っていたわけではありませんが、もっと根底の部分で、この世界を受け入れ、たえず自分を信じる気持ちがあつたように思います。

学生時代の恩師の一人、国文学の教鞭を取っていた俳人の中村草田男先生は、軍国教育まっただ中の時世に、私が生涯忘れられない言葉を遺してくださいました。それは中学1年の3学期、授業の最後に生徒たちに別れの言葉として述べたものでした。

「あなた方は早く大人になりたいと思うでしょうが、大人にはいつでもなれます。だから、なるべくいつまでも純粹に生きていってください」

「純粹に生きる」ということは、完全に体現できるものではなく、生きるうえで大きな目標のようにも思えます。

それは、真・善・美の追求において必要不可欠なものだと言えますが、人の価値観は様々ですから、「この厳しい社会でそんな悠長な生き方などできるわけはない」と感じる人もいるかもしれません。

事実、これまでの世の中は、むしろそうした人たちの価値観によって動いてきたところがあるでしょう。

受験戦争を勝ち抜き、いい大学、いい会社に入ろうと努力することは、ここ

まで述べてきた創造性とは相容れないところが少なからずあります。それは、「直観力など大事にしなくても豊かに生きられる」という、経済性や効率性を優先する考え方につながっていたものかもしれません。

研究の世界でも、こうした経済の世界の価値観を持ち込んで、ポストの獲得や派閥争いのほうに熱心になる人も少なからずいるでしょう。

どんな形にせよ人に認められることは喜びを伴いますから、そうしたものを追い求める気持ちもわからないではありません。しかし、私にはそこまで魅力的なことに映りませんでした。

なぜそうなのだと問われたら、もっと楽しいこと、心が豊かになれることがあったからだと言うほかありません。

どちらがいいという話にはなりません、経済優先の生き方がここまで行き詰ってしまったいま、これからは私のような価値観でも十分に楽しく生きられることを知る人が増えてくるかもしれません。

楽しいことは、自分の内面から湧き上がってくるものであり、人の評価もお

金も後からついてくるものです。それゆえ、認められないうちは孤独や不安を伴う面があるわけですが、それに耐えることで、まわりの価値観に左右されない、自分のなかの豊かさも培われていきます。

研究を通じて培われた内面の豊かさは、老いたいまもなお、私の心のなかに息づき、私の生き方を支えてくれます。この豊かさこそ、これからの世の中を支えていく礎になると思うのです。



これまで「創造とは何か？」ということについて語ってきましたが、私にはこうした創造性の原点となるような大きな転機がありました。

1948年、18歳の早春のことです。

生まれ育った千葉県市川市の自宅から3キロほど離れた浄水場の近くに、人っ子一人いない深い森があり、当時、私はこの森を思索しながら歩くことをひ